



タイトル	137 億年の物語 宇宙が始まってから今日までの全歴史
原 題	WHAT ON EARTH HAPPENED?
著 者	Christopher Lloyd (クリストファー・ロイド)
訳 者	野中香方子 (のなか きょうこ)
出 版 社	文芸春秋
発 売 日	2012 年 9 月 10 日
ページ数	506 頁

本書は、英国のサンデータイムズ紙の科学記者が自分の子供たちのために書き下ろしたビッグバンから福島原発事故までの壮大な宇宙と人類に起きた歴史書です。

本書の原書は、「What on Earth Happened? : The Complete Story of the Planet, Life and People from the Big Bang to the Present Day」で、英語の好きな人にはこちらがお薦めです。

本書の主な特徴をいくつか挙げておきましょう。

- ・ 137 億年の歴史を 42 のテーマで語り、それを 506 頁にうまくまとめている。
- ・ 歴史を点でなく、つながりで考えている。
- ・ 西洋が中心ではなく、アジア、南アメリカ、少数民族、イスラム、など多元的な視点で歴史を描いている。
- ・ 地球的な規模で人類の文明も相対化している。
- ・ ビッグバンから現代まで一人の筆者がすべて通して書いている。
- ・ 著者は英国人だが、西洋的な価値観に偏っておらず、比較的フェアな視点で書かれている。
- ・ 最終章「世界はどこへ向かうのか？」では、進化論の側面から人類の今後について考察している。この点は従来の歴史書にない「理系的な側面」である。
- ・ 豊富なイラストと写真で旅するように歴史を感じる事が出来る。
- ・ 科学と歴史、その接点を考えている。
- ・ 本書の成立事情からも分かるように、学術的なものではないので、物足りなさを感じる読者も多いかも知れない。

さらに、みんなが抱いている以下のような素朴な疑問、

- ・ 生命はどこからきたか？
- ・ 人間はいつ猿から人間になったのか？
- ・ 誰が文字を発明したのか？

- ・ 文明はなぜ滅び、そして生まれるのか？
- ・ なぜ、エジプト文明には大規模な軍隊がなかったのか？
- ・ 紙、印刷技術、火薬世界を変えた中国の発明とは？
- ・ 方程式を発明した中世イスラムの科学力とは？
- ・ アメリカで生まれ、ヒトラーが学んだ「優生学」とは？
- ・ 地球の未来に今なお影を落とす三人の思想家とは？

などに対する答えが判り易く述べられている。

137 億年といっても、地球上の生命の進化が少しと人間の歴史がほとんどだ。ただ、人間の活動については個々の地域の歴史の集合ではなくて、テーマごとに地球規模で関連性を語っているところが面白い。例えば、エネルギー革命から最近の原発問題まで、エネルギーというテーマで時間と国境を越えてまとめられており、新たな視点からの解説はとても新鮮で判り易い。

とくに新しい考えではないが、宇宙誕生 137 億年の時間を 24 時間時計に置き換えたものが全てのページに表示されている。ビッグバンを 00 : 00 : 00 とすると、生命の誕生は 05 : 19 : 48。恐竜が登場するのが 22 : 24 : 00。23 : 59 : 59 になって、やっと狩猟採集民が登場する。われわれの文明社会などは宇宙の歴史に比べると、最後の一秒足らずのほんの「瞬間のドラマ」に過ぎないことに気付かされる。

何はともあれ、目次を見てみよう。各部の構成は以下の通り、

第〇部 表題 ○○○○

何年～何年 P/○○～○○ (全部で○○頁)

24 時間時計では何時 : 何分 : 何秒

第1部 母なる自然

137 億年前～700 万年前 P/8～95 (88 頁)

24 時間時計 00 : 00 : 00

- 01 ビッグバンと宇宙の誕生
- 02 生命はどこからきたか
- 03 地球と生命体のチームワーク
- 04 化石という手がかり
- 05 海は生命の源
- 06 生命の協力体制
- 07 進化の実験場
- 08 恐竜戦争

09 花と鳥とミツバチ

10 哺乳類の誕生

第2部 ホモサピエンス

700 万年前～紀元前 5000 年 P/96～145 (50 頁)

24 時間時計 23 : 46 : 48

11 冷蔵庫になった地球

12 2 足歩行と脳

13 心の誕生

14 人類の大躍進

15 狩猟採集民の暮らし

16 大型哺乳類の大量絶滅

17 耕牧畜の開始

第3部 文明の夜明け

紀元前 5000 年～西暦 570 年ごろ P/146～281 (136 頁)

24 時間時計 23 : 59 : 59

18 文字の発明 シュメール文明

19 王は神の化身 エジプト文明

20 母なる大地の神 インダス文明、巨石文化、ミノア文明

21 金属、馬、車輪

22 中国文明の誕生

23 仏教を生んだインドの文明

24 オリエントの戦争

25 ギリシャ都市国家の繁栄

26 覇者が広めたヘレニズム文化

27 ローマ帝国の繁栄と衰退

28 先住民の精霊信仰

29 コロンブス以前の南北アメリカ大陸

第4部 グローバル化

西暦 570 年ごろ～現在 P/282～476 (195 頁)

24 時間時計 23 : 59 : 59

- 30 イスラムの成立と拡大
- 31 紙、印刷術、火薬
- 32 中世ヨーロッパの苦悩
- 33 富を求めて
- 34 大航海時代と中南米の征服者たち
- 35 新大陸の農作物がヨーロッパを変えた
- 36 生態系の激変
- 37 ヨーロッパ人は敵か味方か
- 38 自由がもたらした争い
- 39 人類を変えたテクノロジー
- 40 白人による植民地獲得競争
- 41 資本主義への反動
- 42 世界はどこへ向かうのか

以上のように、本書は話を 137 億年前から始めて、地球上に起きたあらゆる出来事を、24 時間の時計に当てはめると何時に起きたことになるのかを示しながら、4 部に分けて話を展開している。

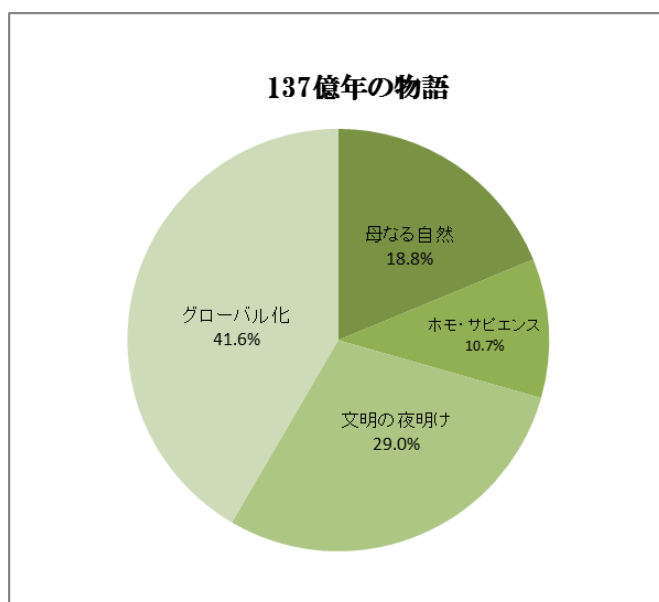
ページ数からみると、本書の構成は右図の通りである。

「母なる自然」では、ビッグバン、恐竜の時代、哺乳類の繁栄と続き、24 時間時計では 00 : 00 : 00 ~ 23 : 20 : 55 まで。

「ホモ・サピエンス」では、人類の誕生、大型哺乳類の絶滅、農耕牧畜と続き、24 時間時計では 23 : 46 : 48 ~ 23 : 59 : 59 まで。

「文明の夜明け」では、シュメール文明、エジプト文明、・・・と続き、コロンブス以前の南北アメリカに言及する。24 時間時計では 23 : 59 : 59 ~ 23 : 59 : 59 と変わらない。

「グローバル化」では、イスラムの成立と拡大、中世ヨーロッパ、大航海時代から世界はどこへ向かうのか？と続き、24 時間時計では 23 : 59 : 59 ~ 24 : 00 : 00 までで、「世界は、休むことのない科学の発展に支えられて、グローバル化した金融、貿易、取引システムの下に統一された。地球とその生態系は、人類のとどまることを知らない要求に今後とも答えてくれるだろうか」という言葉で本書を閉じている。



489 頁に参考文献があり、スティーブン・J・グールドの「ワンダフル・ライフ」、リチャード・フォーティの「生命 40 億年全史」、リチャード・ドーキンスの「祖先の物語」、ジャレド・ダイヤモンドの「銃・病原菌・鉄」、J・ラブロックの「ガイアの時代」等などが挙げられており、それぞれ自己主張の強い作品であるが、「類書の寄せ集めかな」と読んでみるとそうでもなく、なかなかバランスのとれた構成になっている。

本書を読み進めていくと、後半に進むほど中身がどんどん濃くなっていき、読み終えた時には知的に少し太ったなと感じさせてくれるものがある。この 1 冊で 10 冊程度の本を乱読したのに匹敵するような錯覚と満足感を与えてくれる良書です。

3.11 福島原発事故についての記述は、日本語訳の刊行に合わせて付け加えられたものだという。ただ一つ残念だったのは、これだけの分厚い本の翻訳に携わった訳者の「訳者あとがき」がなかったことである。野中香方子氏は「[移行化石の発見](#)」、「[生物たちは 3/4 が好き](#)」などの翻訳を手掛けており、しっかりした「訳者あとがき」を書いている。訳者がどんな気持ちで本書を読んだかは筆者が知りたかったところである。

2013.5.11